インフィニット・ストラトス～アナザーエピソード～

犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス～アナザーエピソード～

【Ｎコード】
Ｎ６６８９Ｔ

【作者名】
犬

【あらすじ】
変わらないと思ってた。

いつもと同じ日常
いつもと同じ光景
いつもと同じ終わり

けど、それは唐突に壊れた……

注意事項

これは作者の独自設定やご都合主義がありますが、正直、面白く見ていただければ僥倖です。

では、どうぞ

プロローグ（前書き）

さて、どうしようかな？

プロローグ

ｓｉｄｅ・？？

目が覚めるとそこは白い空間だった。
辺りを見回すと隣に何かがある。

「って、『？？』！？」

俺は慌てて隣でうつ伏せに倒れていた『？？？？』を揺さぶる。

「ん……。」
「おい『？？』、起きろって。」

すると、ゆっくりと？？が起き上がる。

「……。」

だが非常に残念そうな顔になる。

「何だよ？」
「いやさ、こう言う時は美人のキスで目覚めるものじゃないのかな？と。」

とりあえず、一発叩いておく。

「痛い。」
「言ってろ。ってか、今の状況を先に把握しろ、この馬鹿。」
「……ここは？」

「分からん。俺も今起きたばっかりだし。」
「何か、映画のバイオの病院の１室みたいだな。」
すると、『？？』の視線が正面を向く。
俺も続いてそっちを見ると、さっきまで無かったはずの出口があった。

「……何だ、あれ？」
「……分からん。」
正直、そろそろこの状況に思考が追いつかなくなってきた。
「鞄は？」
「手元にある。こっちがお前の鞄。」
『？？』が自分の鞄を開けて中身を確認する。
「携帯は？」
俺は携帯を見る。
「圏外。そっちは？」
「……アウト。」
つまり、完全な密室か。
「……とりあえず、あの怪しさ１２０％の扉を調べてみるか。」
「そうだな。」
すると、扉が開く。

「はろはろ。」
そこに居たのはそこそこイケメンの青年が居た。
「誰だ、あんた？」
俊が冷静に尋ねる。
ってか、この展開って……。
「君達風に言うなら神様かな。」
「は？」「やっぱり。」
？？の頭は今の状況に追いついていないだろうが、俺は微妙に付いていける。
これは所謂転生モノで、目の前のイケメンが神様って事だろ？
「そうだよ。」
「！？」
こいつ、俺の心を読んだのか！？
って、当たり前か。自称とは言え、神様だもんな。
「そうだよ、？？？？くん。それと？？？？くん。奇襲をしようとしても無駄だよ。
心が読めるって事は、先の手も理解できることだから。
幾ら君が格闘術を達人クラスまで習得していても心までは隠せないよ。」
「……。」

??の顔が苦虫を潰したような顔になる。
つまり奇襲しようとした訳ね。凄いなお前。

「さて君達は今名前が分からないよね。」
「え?」「あ。」

そうだ。俺は『??』の名前が言えない。

「そ、そう言えばそうだ。どうなってるんだ?」
「ま、過程を全てザックリ斬って結果だけを話すのなら、君達は死んだんだよ。」

……死んだ?

「そっか、それはしょうがないな。」
「って??、お前、そんなんで良いのか!?」

『??』のあまりにも割り切った言葉に反論した。

「だって、実感無いんだからしょうがないだろ。」

いや、そりゃそうだけどさ。
そう言われると何も言えないじゃん。

「ってか、死んだ理由は!?」
「事故だよ。純粋な事故。」
「「……。」」

疑いのまなざしを送る俺と『??』。

「うちの下っ端がお茶を割ってかけらが君達に直撃したんだよ。」
観念したのか自供した犯人。
とりあえず、2人で1発ずつ殴っておく。
「だ～か～ら、特別に君達を別の世界に送ってあげるんだ。」
「所謂、転生って奴か。」
??の問いに神様は頷く。
「今風に言うとそうだね。しかも僕の管理する世界は無限だし、抑止力も働かないよ。」
「なるほど。」「そりゃありがたい。」
ま、抑止力が働かないのは正直ありがたい。
それこそ、英霊エミヤが出てきた日には勝てる気がしない。
「ISの世界でお願いします!!」
「良いよ。」
「あっさりだな。」
余りにもすんなり決まったから??が突っ込む。
「言ったろ。僕の管理する世界は無限にあるとね。」
すると神様が咳払いを1つ。
「で、容姿とかの変更はある?」
「俺は特に無し。親から貰ったのを弄る気はないよ。」
「じゃあ俺も無しで。」

実際、俺も??もそこまでキモ男じゃないし。
元の世界じゃ余り目立ちそうに無い容姿〜所謂モブキャラ〜だったし。
けど??の顔、どうも運命の青い槍の兄貴に似てるんだよな。
それとも俺の気のせいかな？

「そして俺たち専用のＩＳをくれ。」
「ＯＫ。じゃあＩＳを想像して。それが君達のＩＳになるから。」

想像する。
姿形を必死に想像する。

「……良いよ。形成は完了。後はあっちの世界で確かめてね。」
「了解。」「分かった。」

後は出たとこ勝負か。

「最後に何か欲しいものはある？……言っておくけど、チートは無理だからね。
せいぜい頭が良くなったり運動神経が向上するが限界。
死なないとか無敵とかは不可能だから。
神様って言っても万物の法則は崩せないから。」

正直、ステータスＭＡＸを頼もうと思ったんだが無理そうだな。
やっぱり小説みたいにはいかないか。

「大丈夫、贅沢は言わない。金の減らない財布と秀才以上天才以下の頭脳が欲しい。」

おい??、贅沢すぎるぞ、それ。
でも、俺も欲しい。

「なら俺も同じのを。」
「OK。他にはない?」
「特に無し。」
「無いな。」
「じゃあ、あの扉を通ればお望みの世界だ。」
「神様、感謝はしておく。」
「とりあえず礼は言っておくぜ。」

感謝の言葉を忘れずに言う。
どんな事であれ、憧れの世界へ転生できるのだから。

「あぁ。二人に幸あれ。」
「それじゃ。」
「行きますか。」

俺たちは扉を潜る。
その瞬間、光が俺達を包んでいく……。

プロローグ（後書き）

さて、あげたが今後どうしよう？

友人のＴＩくん、上げたよ

どうだったかは感想でよろしく

ではでは

第1話「適正、あり」（前書き）

戦闘シーンは次回に持ち越し！！
ってか、心理描写面倒くさい！！

第1話「適正、あり」

ｓｉｄｅ・？？？？

懐かしい夢を見た。
前の世界の夢。
母さんを失い、変わらない日常を選んだ俺。
変化する事を嫌い、他人を傷つけないように生きた俺。
結果、色々なものを失った。
けど、後悔はしていない。
あれも１つの答えだったから。

こっちの世界でも同じだった。
変わらない日常を過ごし、凄い父親の背中を見て、最強の母親の背中に憧れ。
そんな、遠い昔の日常。

あぁ。本当に、変わらなければ良かったのに……。

夢は、唐突に終わりを告げる。
父さんと、母さんの死で。

ｓｉｄｅ・黒澤

「……。」

布団から出て頭を掻く。

「また、か。」

朝から嫌気が差す。
もう何年も前の出来事を未だに引き摺っている弱い自分に。

「……行くか。」

壁に掛けてあった服を着て、朝食を取り家を出る。

俺の名は黒澤俊。
大手企業『三嶋総合株式会社』の創始者を祖父に持ち、色々と凄い、今は亡き両親を持つ事以外は
普通な、何処にでも居る青年だ。
ま、何処にでも居る青年の部分はよく突っ込まれるが、もう気にしない。
あの後、俺はこの世界で再び生まれ、この名で１６年間過ごしているが、特に不自由はない。
……赤ん坊の頃のあの恥辱と羞恥は地獄だったが、鋼鉄の精神で乗り切った。

「うっす。」
「遅刻だぜ。」

待ち合わせの駅前に居た顔馴染みの青年に挨拶すると怒られた。

「わりぃ、ガッキー。」
「良いぜ。」
俺は幼馴染であり、向こうでは相棒だったガッキーこと板垣鷹に謝る。
ま、向こうも本気で怒っていないからそこまで問題じゃないけど。

「さて、行くか。」
「ＯＫ。」
男二人寂しく、会社の研究所へ向かう。

さて、今、俺とガッキーは高校の春休みを利用して会社の研究所を見学をしていた。
世間じゃ織斑一夏がＩＳ動かしたって騒いでるけど、正直どうでも良いや。
最近は別に原作に介入しなくても良いと思い始め、２度目の高校生活を謳歌している。
まあ、まだ彼女は居ないけどね。

そう言えばこの１年、俺たちは向こうでの名前を思い出せない。
けど、それも良いと思う。
今の俺達は黒澤俊と板垣鷹。それ以上でもそれ以下でもない。

しかし、ここじゃ会う人会う人にや「坊ちゃん」や「若様」と呼ばれる事がある。
正直、止めて欲しい。
この会社は社長は実績と実力で選ばれるし、何より恥ずかしい。

「ちーす。」
「お邪魔します、誠也さん。」
扉を開けて部屋に入る。
そしてガッキーの親父さんであり、ここの主任でもある板垣誠也さんに挨拶する。
「お、鷹に俊君？一体どうしたんだ？」
「「暇つぶし（です）。」」
そしてガッキーだけ叩かれた。ドンマイ。
「まあ、好きにしなさい。あまり物を触らなければ特に何も言わないよ。」
「ほ～い。」「はい。」
辺りを散策する。
パイルバンカー、マシンガン、ショットガン、ブレード……鉄球？
他にも設計図やプログラム関係の書類……エロ本があった。
手に取ってみる。
「すげ。無修正だ。」
ガッキーが食い入るように見る。
おいおい。
「……良いのかよ、これ。」
正直もう少し見たかったが、とりあえず元の位置に戻す。
と言うか流石にＩＳ研究所だけあって、どれもこれもＩＳ関係（一

部除く）ばかり。
正直、俺らには宝の山だ。
「ん。……これは？」
目の前の黒い機体……と言うか、ゲシュペンストを指差す。
と言うかこれ、俺が想像したＩＳじゃん。
どうしてここに？
「あ、それは新コンセプトを元に開発したんですけど、誰も動かせないんですよ。」
隣でキーボードを打っていた若い研究員が話しだす。
「ん、どう言う事？」
「コアが拒否するんですよ。設定しようにも拒否するし、困ってるんですよ。」
コアが拒否って、面白い表現だな。
「で、こっちの紫は？」
隣のＩＳ……ヒュッケバインを指差す。
「基本はほぼ同じコンセプトで設計したんですけど、基本フレームが違うんですよ。
紫がＨフレームで黒がＧフレームです。」
「ふ～ん。」
さて、どうしたものか。

幸い、ここにはパソコンに釘付けの若い研究員が1人。
……チャンス。

「おいガッキー、紫に行け。俺は黒に行く。」
「了解。ってか、動くのかよ？」
「さぁ。」

俺は黒のＩＳに。ガッキーは紫のＩＳに触る。
その瞬間、膨大な量の情報が俺の頭の中に叩き込まれる。

「「！！？？」」

「け、計器類に異常！？い、一体何が！？」
「観測班、データ収集を必ずしろ！これは、ヤバイぞ！」
「主任、ＣＰＵの処理速度を情報習得率が超えます！！このままじゃパンクしますよ！！」
「だったらスパコンを動かして対応しろ！
最悪、試作品の量子コンピューターを使っても構わん！！
このデータは今後、必ず役に立つ！！」
『了解！！』

周りが騒がしいがこっちはそれどころじゃない。
キャパシティを越える膨大な量の情報に意識が遠のきそうだ。

……
……
……
…

「ん？」
「あれ？」

そして、気がつくとベットの上で２人仲良く寝てた。

それから２日後、爺さんからの命令で２人仲良くＩＳ学園への（強制）入学となった。

……１年生、またやり直すの？
……マジで。

第1話「適正、あり」（後書き）

少し詰め込みすぎた勘はありますが、どうしよう。
まあ、感想などで考えますか。
追伸
T．I君。弾けるのは中盤からだからもう少し待ってね。
その時には約束通り凄い事にするからw

第2話「初陣」（前書き）

会長無双や先生無双ではありません。
理由はあとがきに

第2話「初陣」

side・板垣

1週間後。
春休みも終盤を迎えた頃、俺は腹を抑えながらIS学園の門をくぐった。
決して、腹痛を起こしている訳ではない。
腹痛の理由は単純。

「さて、勝ちに行くか。」
「正気か貴様。織斑千冬と更識楯無を相手に勝てる訳無いだろ。」

何処をどう間違ったのか、ISの試験に最強2人を相手にする事になった。
しかも俺達のISは学園内に既に搬入されているらしい。
その上、あの後ドタバタして初期化も最適化もしていない。
……これ、新手のいじめか？
しかし俊は拳を鳴らして戦う気満々。良いな～、その元気をオラにも分けてくれ。

「ま、最初から気合で負けていれば勝負にもならんぞ。」
「リアルにやってられね～。ってか神死ね。」
「酷いね～。せっかく演出してあげたのに。」

すると、スーツ姿のいかにも偉そうな人が現れる。
周りの女子が騒ぐが、知るか。

「久しぶり。1ヶ月ぶりかな？」

「神野さん、こんにちわ。」
「こんちわ、神野さん。」

とりあえず、神野さんに挨拶をする。
神野真。一応、神様の分身で俊の実家の会社の社長。
こちらの世界での神様の分身で、アドバイザーの1人。
基本的には良い人だが、お茶目な性格で俺達を困らせて楽しむS。
まあ、俺はMだけどねw

「で、俺達のISは？」
「もう第3アリーナのピットで開封待ちだよ。」
「分かりました。」「了解。」

返事をし、神野さんの後についていく。

「さて、開けるよ。」

2コンテナから出てきたのは黒と紫のIS。
今後、俺達の片腕となる相棒達。

「数日振りだな。」
「あぁ。本当に動かせるとは思わなかったぞ。」

しみじみと言う。
俊も何か懐かしいと言った感じの表情をする。

「おかげで平凡な高校生活は1年で終了だ。」
「……だな。」

本当に涙無じゃ語れないよ。
去る間際、男共に「ハーレム死ね」や「俺と代われ」とか言われた。
自分に、これから待ち受ける悲しい日々を彼らは知らない、と言い聞かせながら学校を後に……。

「あれ、目にゴミでも入ったかな？涙が出てくるよ。」
「あ、本当だ。今年の花粉は強力だな。」

本当に、どうしてこうなった！？
心の中で叫んでいると神野さんが近づいてくる。

「対戦相手が決まったから発表するよ。」
「どーんと来い！！」

半ばやけくそ気味に叫ぶ。
すると何処からかドラムロールが鳴り始める。
ってか、何処から鳴ってるんだ、これ？

ダダーン。

「俊くんが会長さん、鷹くんが織斑先生。」

ジーザス！！
勝てる要素０じゃん！？
どうする、アイ〇ルー。

「代われ。」
「ヤダ。」

即効で拒否された。
ってか、ムリゲーすぐる。
Ｌｖ１の勇者がラスボス相手に勝てる訳無いじゃん。
出来レース見てて面白い訳！？

「ルールは簡単。二人とも３分持てば勝ち。」
「３分？」

某眼鏡大佐の台詞しか思い浮かばない俺に罪は無い筈。

「そう。後はハンデで性能を落としてくれるそうだ。」
「ありがて～。」「……全力でも良いのに。」

おい俊君、何、不穏な事言ってるの？

「ま、負けても入学だから、最終調整だと思って頑張ってくれ。」
「了解。」「ほいほい。」

ま、しょうがない。
サイは振られたんだ。あとは天命を待つのみ。

ｓｉｄｅ・黒澤

「さて、行くか。」

眼鏡を外してスイッチを切り替える。
とりあえず水着……もとい、ＩＳスーツを着る。
フィット感は最高。着心地の良さは抜群。
次にＩＳを装着する。
一瞬、暖かい気持ちになる。……何だ、今の？

「現状、君が彼女に勝てる可能性は０に等しいから、時間だけ稼ぎなよ。」

まあ、あの更識に勝つのは不可能なのは分かっている。
実力差が如何し難い事も理解できる。
だが、それでは面白くない。
やるなら徹底的に、だ。

「神野よ、時間を稼ぐのは良いが、聞いておくぞ。」
「何かな？」
「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

間が空く。
普段なら紅茶の死亡フラグだが、あえて挑んだ。

「ふ、あはははは！！良いよ。最高に良いよ！！
期待して待ってるよ、俊くん。」

俺はゲート前に立つ。
準備は万端。あとは最善を尽くすのみ。

「相棒、ＧｏｏｄＬｕｃｋ～幸運を祈る～。」
「了解。」

ＯＰＥＮの文字と共にシャッターが開く。
俺は頭部のバイザー兼防具のヘットギアを被る。

「アサルト０１、Ｔａｋｅ　ＯＦＦ。」

俺はカタパルトから出撃する。

相手は元幼馴染の更識楯無。
久しぶりの再会か。……成長してるな、うん。
何処とは言わないけど。まあ、全体的に女性らしくなったな。
まあ、最後に会ったのが１０年近く前ならしょうがないか。

「久しぶりだな、更識。数年振りか。」
『硬いよ、しゅー君。昔みたいに●●ちゃんで良いのに。』
「……考えておく。」

ぶっきらぼうに言うと、何故か嬉しそうな顔をする更識。
……ミスったかな？フラグ、立てたっけ？

『ほ、本当だね。じゃあお姉さん、がんばるぞ。』
「ふっ、良いぞ。」

さて、この余裕が何時まで持つか。
開始早々敗れるのは避けよう。

『では、戦闘開始！！』

号令直後に俺は後方に下がり、Ｍ９５０マシンガンを選択する。
相手の情報が少ない以上、迂闊なことはしたくない。
だが正直な所、そうも言ってられない。

ミステリアス・レイディ～霧纏の淑女～。

モスクワの深い霧のデータを元に更識が１人で組み上げたフルスク

ラッチタイプのＩＳ。
性能差はそこまでないだろうが、問題は操縦者の技量差。
こればかりはどうしようもない玄人と素人の差は大きすぎる。

「本当、ままならないな。」

俺は左手のＭ９５０マシンガンを正射する。
だが距離を開けすぎたのか射程が圧倒的に足りない。
目標に命中する前に弾が全てバラける。

『その距離からじゃ届かないんだね。』
「セット。」

左手のＭ９５０を仕舞い、Ｍ１３ショットガンを取り出し、装備する。
そして距離を詰めるべくブースターを噴かし接近する。

『甘いよ。』

更識も蒼流旋の四門ガトリングガンを正射してくる。
俺は慌てる事無く危険弾のみ回避する。
数発掠ったり命中したが、さして問題ではない。まだ持つ。
そして中距離でショットガンを数発、撃つ。
だがまだ距離が足りないのか、微かにダメージを与えた程度。
火力が圧倒的に足りない。

「レーザーブレード、セット。」

右手にレーザーブレードを展開させ、ブースターを起動させ一気に距離を詰める。

更識も蒼流旋を構える。
1合
2合
3合
4合目の鍔迫り合いから更識を弾き飛ばし、離れ際ショットガンを撃つ。
しかし直前で蒼流旋で防御され、致命弾にならなかった。
だが続けて追撃に数発撃つが、効果が低い。
流石に欲張りすぎたか。

『まるで閃光だね。二つ名は『漆黒の閃光』かな？』

冗談交じりで更識が蒼流旋を構え直す。
俺はショットガンとレーザーブレードを仕舞うと、インパクトステークを取り出す。
俺の現状、最強の『切り札』。
未完成の代物だが、1回2回なら耐えれる筈。

「冗談交じりだが、少し声に緊張が入っているな。」
『まぁね。それなりに緊張はするよ。』
「なら、撃ち抜く！」

ブースターで再び接近し、ステークを衝き立てようとするが。

『読めれば余裕だよ。』

易々と回避される。
だが、俺は止まらずそのまま突き抜ける。
その瞬間、停止する筈だった位置にガトリングガンが撃ち込まれる。

『へぇ。』
「くっそ。モーション変更、再設定開始。」

壁を蹴り姿勢制御を無理やり行い、更識の方を向く。
背部ミサイルの設定を弄りもう一度、加速して接近する。

『期待外れだね、馬鹿の一つ覚えみたいに。』
「そうか。なら期待通り。」

俺は背部のスプリット・ミサイルのコンテナ全てを更識に向けて射出する。
コンテナからミサイルが発射される。

『全て落とすよ。』

更識が蒼流旋を構えたのと同時に、全てのミサイルが爆発する。

『っ！？』

爆音と共に炎と煙が俺と更識を包む。
だが、まだ見える。
さっきの映像でお前の位置が。

「撃ち抜く！！」

俺は確実に更識にステークを突き立て、トリガーを引く。

しかし威力が足りなかったのか、一撃で撃ち抜けない。
「ちっ。そうは問屋がおろさぬか。」
即座に加速し距離を取って反撃に備える。
煙が消え、更識が現れる。
『じょ、冗談だよね。5割もエネルギー削ってまだ足りないの？』
無茶を通り越した無謀に流石の更識も呆れるが、俺にとってはまだ、足りない。
『切り札』全て切って倒せないのは、未熟以外の何物でもない。
「当然だ。この切り札を晒したのに撃墜できないのは痛すぎる。」
言いながら『リロード』を選択する。
一発しか撃てないのは本当に痛い。
これが本来の性能なら、確実に撃ち抜けた。本当に、残念だ。
「特に、お前なら即席の対抗策くらい、直ぐに編み出す筈。
なら、俺には敗北しかない。」
『買いかぶりすぎだよ。そこまで……。』
すると、ピーと言う機械音が鳴る。
『そこまで。勝者、黒澤俊。』
余りにもあっけない幕切れに少し不満顔になる。
『終わっちゃったね。』

「……そうだな……。」

少し、無言の空気が流れる。

『続き。』

「ん？」

次に口を開いたのは更識だった。

『期待しても良いんだよね？』

確かにこれは俺も目覚めが悪い。

ならば、最後まで戦える環境になるまでは待つか。

「ご希望ならば。あと、最初から本気で来いよ。

今日みたいに最後まで半分程度の実力じゃ、つまらないからな。」

『あはは、ばれてたか。』

分からないでか。

お前は腐っても代表。手加減されていることぐらい分かる。

「ま、今度はガッキーと千冬さんだ。早く上がるぞ。」

『そうだね。』

全く、あの事さえなければ、こいつとも普通に居られたのにな。

本当に、どうしようもないな。

ｓｉｄｅ・板垣

『初期化、最適化終了。搭乗者は登録をお願いします。』
「板垣鷹。」
『音声登録。静脈登録。網膜登録。……完了しました。』
「ＩＳ『ヒュッケバイン』、起動。」

とりあえず、手をニギニギする。
問題なし。
次に歩いてみる。
問題なし。
最後に武装を確認する。

・Ｍ９５０マシンガン×１
・レーザーブレード×１
・フォトンライフル×１
・ブーストハンマー×１

……ブーストハンマー？
男の浪漫が何故ここにある？

「突貫で調整したから６０％が限界だったよ。」

申し訳なさそうに神野さんが言う。

「全体的にですか？」
「うん。けどそこら辺は実際に動かないと分からないんだ。」
「ほーい。」

とりあえず返事をする。

「相棒、ＧｏｏｄＬｕｃｋ。」

ベンチに座っていた俊が親指を立てる。

「ＯＫ。」

親指を立て返す。

『ＯＰＥＮ』と表示され、シャッターが開く。

「ホーク０１、ＴａｋｅＯｆｆ。」

俺もカタパルトから出撃する。

相手は既にスタンバイしていた。

〜織斑千冬〜

最強の称号『ブリュンヒルデ』を持つ、文字通り生きた伝説。

正直、俺には荷が重過ぎる。

ハンデとしての打鉄もハンデの様な気がしないし。

しかし、良いスタイルですな千冬さん。

正直、思春期真っ只中の俺にはキツイです。

更識も中々だったが、甲乙つけ難い。

『……何だ？』

流石に見とれすぎたか。自重自重。

「準備が出来ました。」

『分かった。』

短く言うと彼女が日本刀を構える。
俺もＭ９５０を構える。

『では、演習開始。』

その瞬間、打鉄が俺の目の前に現れる。

「っ！？」

直感でマシンガンを手放し下に墜ちた。
刹那、マシンガンが真っ二つになる。
って、真っ二つ！？

『ほう、勘が良いな。』
「横は払い、後ろは突き、上は切り上げ。死角はギリで下だけって事かよ。」

正直、ぞっとする話だ。
本当に相手次第ではそのまま必殺コンボだろうに。
俺、よく反応した。

「レーザーブレード、アクティヴ。」

俺は即座にレーザーブレードを抜き斬り結ぶが、直後に弾かれる。
１合って、冗談みたいな展開だ。

「マジかよ！？」
『甘い。』

刀を振るわれる直前、後方に大きく跳躍する。

流石にあれを2度も紙一重で避ける気は無い。
熟練者や命知らずならまだしも、素人以上達人以下の俺には不可能に近いし。

とりあえず、冷静に武器を見てみる。
武装は刀一振り。あの人らしいと言えばあの人らしい。
ならば距離を離しつつ射撃戦に移行するべきか。

「フォトンライフル、セット。」

フォトンライフルで射撃戦に持ち込むが、千冬先生は器用に斬り落としていく。

「って、弾を斬るか普通！？」
『私には余裕だぞ。』

もうやだこの人。人類じゃなくて新人類で良くね？
コーディネイターも真っ青のチート能力だよ。

その後はどうにか射撃で間合いに入られないようにするが、埒が明かない。
そして弾切れになると直ぐに懐に入られ、1撃目を食らう。
2撃目はフォトンライフルを盾にし、逃げる準備をする。
3撃目は避けられずに食らうが、何とか後方に跳躍し距離を開ける。

「さて、どうしよう？」

武装を確認しながら回避と防御を繰り返す。
理由は分からないが武装が最低限しか入ってなかったらしく、もうネタ武器しかない。

だが、それ故に手に取る。男のロマン溢れるネタ武器を。

「ブーストハンマー！！」

俺は数回転して勢いをつけたブーストハンマーを全力で投げた。

「だっしゃぁあああああ！！！！！」

……投げた？

「ぁあああああぁっーーーーー！？！？」

気付いたときには既に遅く、ハンマーが織斑先生目掛けて飛んでいく。

よし、このまま当たれ！！

だが無情にも織斑先生が左に動くと横を素通りし、壁に埋もれる。

しかも、さっきのハンマーで武装は無くなった。

つまり……。

「覚悟は出来ているな。」

笑顔が綺麗な織斑先生、素敵です。

「Ｏｈ，ＭｙＧｏｄ．」

残りの１分間を回避と防御のみで過ごす事になった。

『試合終了。勝者、板垣鷹。』

結果、何とか逃げ切った。

すげ～な、俺。

決めた、もう2度とこの人と戦うものか。

第2話「初陣」（後書き）

当たり前のようですが、更識会長も織斑先生もかなり手加減してます。

数値で言うと更識会長が普段の３０％、織斑先生が普段の２０％です。

故にド素人２人が何とか対等に渡り合えたのです。

じゃないと、最初から本気の２人を相手に3分も持ちません。

それだと流石に『……』なので。

第3話「3度目の高校入学式」（前書き）

今回は相方オンリーです。
始業式？
全面カットしました。悪しからず。

第3話「3度目の高校入学式」

ｓｉｄｅ・板垣

高校生活二度目の始業式を終えて教室へ俊と向かう。
まさか本当に1年生から始めされるなんて……。
流石は金持ち。そこに痺れる憧れる～。

バシッ。

何故か俊に叩かれた。
お前、読心術でも習得したか？

しっかし、原作見た時に「ウハッ、一夏マジハーレムｗ」と言ってた自分を殴りたい。
リアルだとマジでキツイです。
え、何故って？
さっきから女子からの視線が痛いんだよ！！
しかも半分は不審と興味の視線。
泣いてもいいよね、俺。

「しかし、ここじゃ珍獣認定だな。」

眼鏡を外した俊が話しかけてくる。
ってあなた。珍しいね～。普段は眼鏡っ子の癖に。

「リアルだとここまでキツイんだな。本気でやってられねぇ。」

愚痴りながら教室に向かう。

周囲の目？気にする訳が無い。寧ろ知ったことか。

「同感。比率的には９：１。喜べよ、お前が望んでたハーレムだぜ。」

「ｏｒｚ。リアルだと逆に生き地獄だよ……。」

「そりゃそーだ。」

俊が楽しそうに笑う。

たまに八重歯がキラリと光るが、この世界の影響か？

……気にしたら負けだな、うん。

教室の扉に貼り付けられていた座席表を見る。

やっぱり一夏と一緒の組か。ま、当然と言えば当然か。

「っと、先生が来たぜ。急ごう。」

さて、波乱万丈に満ちた学園生活の始まりだ。

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田　真耶です。」

山田先生が自己紹介するが、反応するのは俺と俊のみ。

他は総じて静か。ハッキリ言おう、寂しい。

「あ……え？」

その様子にかなり慌てる先生。

ってか正直、先生には見えないよ。

それこそ、学生服を着れば学生に見える外見。そして、あの贅沢ボディー。

ぜひとも先生にはコスプレとしてここの学生服を着てもらいたい。
「き、今日から皆さんはこのＩＳ学園の生徒です。この学園は全寮制。
学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい３年間にしましょうね。」
山田先生は学園の説明をするが、これまた反応するのは俺と俊だけ。
俺達はそうでもないが、山田先生にはキツイぞ。
実際泣きそうだし。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で板垣君？
自己紹介、良いかな？」
「あ、はい。」
そういや、順番じゃ俺が一番目だっけ。原作じゃ一夏が先だったが、良いか。
とりあえず教壇に立つ。
「板垣鷹です。趣味は機械弄り、特技は機械の簡単な整備です。以上。」
特に何も起こらなかったが、むしろ安心した。
逆に何かを期待されても困る。
「あ、ありがとう。えっと次は織斑君、織斑一夏君！！」
「は、はい！」
来た。我らがハーレム主人公、織斑一夏。

原作じゃ目つきが悪い感じだったけど、リアルだと本当に普通だな。
まあ、ハーレム主人公の大半はそんな感じか。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。でも”い”の次は”お”なんだよね。
自己紹介してくれるかな？駄目かな？」
「あの、そんなに謝らなくても。」

何かしぶしぶ教壇に立つ（様に見える）一夏。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

さて、どう言うかな。

「……以上です。」

教室全員が吉本新喜劇顔負けな滑り方をする。
俺は思わず突っ込みそうな衝動に駆られたが、目立ちそうなので自重、自重。
直後、痛そうな音が教室に響く。

「いっ！！って、げえっ、関羽！？」

え、この人どっちかって言うと呂布じゃね？
赤兎馬（ＩＳ）に乗って武器（出席簿）を振るう。
……うわぁ。死屍累々の光景しか浮かばないや。

「誰が三国志時代の武将だ。」

再びいい音が鳴る。

ってか、明らかに出席簿の音じゃないだろ、それ。

「諸君、私がこのクラスの担任の織斑　千冬だ。
君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ。
私の言う事をよく聴きよく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。
私の仕事は若干15歳を16歳まで鍛え抜くことだ。
逆らっても良いが私の言うことは聞け。いいな。」

俺は慌ててこの後の為に両耳を手で塞ぐ。

『キャーーーーーーー!!』

千冬さんの自己紹介とともに、クラス中から歓声が響き渡った。
俺は耳を塞いでおいたが、効果が見られない。
ってか、黄色い声キツイ!!と言うか耳が、耳が!!
つーか俊、お前何時の間に耳栓とイヤホンの完全装備!?

「千冬様、本物の千冬様よ!!」

そりゃ織斑千冬って名乗ったろ。
お前の耳は節穴か?

「私お姉さまにあこがれてこの学園に来たんです、北九州から!!」

じゃあ俺たちは別世界から来たぞ。
どうだ、凄いだろ。

「私、お姉さまのためなら死ねます!!」

過激だな、おい。
つーか、もう末期だ、こいつ等。
「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させてるのか？」
千冬先生が本当に呆れてるな。
しかもこれって毎年なんですか？
マジ憧れますよ、千冬先生。俺なら1年目でストレス性胃炎確定です。
「きゃぁぁぁぁ！！！お姉さまもっと叱って罵って！！」
「でも時には優しくして！！」
「そして付け上がらないように躾して！！」
うわぁ……マジ引き。
罵倒されて喜ぶ女子って初めて見たわ。
ま、俺も他人の事は言えんがな。
「――――　静かにしろ。」
千冬先生の一喝で教室が静かになる。
流石は織斑千冬。最強の名は伊達じゃないな。
「……で、お前は挨拶1つ碌に出来んのか？」
拳を鳴らして千冬先生が一夏を睨む。
「いや、千冬姉……それはヘブッ！？」

再度、一夏の頭部に出席簿が直撃する。
あら、いい音。
ってか、今日だけでどれだけの脳細胞が死んだことやら。

「織斑先生だ。いい加減、同じ事を言わせるな。」
「は、はい……織斑……先生。」

そんな姉弟の仲睦まじい（？）やりとりを余所に、女子達がヒソヒソと話し始めた。

「ねぇ、織斑君ってあの千冬様の弟なの……？」
「それじゃあ……男で唯一ＩＳを使えるっていうのも……それが関係してるのかしら？」
「でも羨ましいわね。」
「私も千冬お姉さまの妹だったらな～。」

正直、あれが羨ましいのなら君達は即座に精神科か脳外科に行くべきだよ。
叩かれて喜ぶようじゃ、重症を通り越して手の施しようが無いよ。
……そう言えば俺もそうだった。
すると再び机を叩く音がする。

「もう一度言う、静かにしろ。」

静かな一言に教室が静まる。
お～お～怖い怖い。

「……板垣、何か言いたそうだな。」

しまった、不味い、目を付けられた。
とりあえず視線の方向を変えますか。

「先生、黒澤君の自己紹介がまだです。先に進めないと時間がありませんよ。」

差し当たりの無い正論を吐く。

「そうだったな。山田先生。」
「は、はい。え、えっと、次は黒澤君。」
「了解です、山田先生。」

わ、山田先生が喜んでる。
よっぽど嬉しかったんだな。
俊が教壇に立つ。

「黒澤俊です。趣味は釣り。特技は空手と合気道です。これから3年間、よろしくお願いします。」

こいつのも特に何も起きないから面白くない。
こう言う時こそ、何か起きれば良いのに。

少しして、全員の自己紹介が終わる。
さてさて、これからどうなる事やら。
とりあえず、安全に学園生活を過ごせる様に祈ろう。あの神様にでも。

第3話「3度目の高校入学式」（後書き）

一応言ってきます。
相方はそこまで変態ではありませんw
まあ、他人にどうこうは言いませんが、ここじゃ自重させます。
ただし、本人の希望によりある所ではハキリらせます。

相棒、安心しろ。
お前の望みは叶える。
だから待てw

第４話「オルコット、襲来」（前書き）

専門が鬼みたいに忙しい。
更新が滞るのは避けねば……。
ＦＥ午前免除、頑張れ俺。
もう１ヶ月切ったぞ。

第４話「オルコット、襲来」

ｓｉｄｅ・黒澤

ＩＳについて何を習うのかと思っていたが、これは正直キツイ。
例えるのなら、専門学校の授業内容とほぼ同じだ。
専門用語と基礎知識が大半で、一般教養は程々。
これは就職先が限定されるな。やれやれ。

余談だが、途中で織斑が「全部分かりません」と言った時には流石に机と額がキスをした。
織斑、参考書と電話帳を間違えるのは世界広しと言えども君だけだろう。
まあ、原作通りと言えば原作通りか。
その後はお約束の織斑先生から出席簿の攻撃を食らって痛がってた。
南無阿弥陀仏。

１時間目終了後の休み時間。
眼鏡を付け直し、スイッチを切り替える。

「少し良いかい？」
「えっ？」

私は右隣の織斑の方を向く。

とりあえず、挨拶をしますか。この3年間仲良くしそうになりそうですし。

「初めまして。私は黒澤俊。年齢は君達より1つ上だが、敬語は必要ないよ。」

「で、俺は板垣鷹。こいつの相棒で周りからはガッキーって呼ばれてる。」

何時の間にかガッキーが私の肩にもたれ掛かって挨拶をする。

とりあえず、アッパーカット気味に殴っておく。

「あべじっ！？」

うん、クリティカルヒット。

それとそこの名無しの女子さん、私×ガッキーとか止めてくださいよ。

色々と裁判沙汰になりそうですし。

「あ、あぁ。俺は織斑一夏。一夏で良いぜ。」

今の光景に驚きながらも挨拶を忘れない一夏。

なるほど。確かにこれは好感が持てますね。

ま、その結果がハーレムならば少しイラッ☆としますがね。

「了解です。」「ＯＫ。」

いつの間にかガッキーが復活していた。

ゴキブリ並みの生命力だな、こいつ。

「本当に助かったぜ。正直、生きた心地がしない。」

「確かに。」「そうだよな〜。」
私とタッカーが異音同意の言葉を口にする。
ふと、女子生徒がこちらに向かってくる。
彼女は……。

「一夏、お客さん。」
「え？って箒？」
篠ノ之箒と言うとかの有名な『天災』が溺愛する妹か。
原作通りなら、一夏オンリーでしょうし、今はスルーしますか。

「一夏、話がある。」
「行けよ一夏。女性の誘いを断るのは紳士として恥ずかしいぜ。」
ガッキーが皮肉を言う。
すると篠ノ之さんがこちらを睨んでくる。
私は他人事と決め込み、ガッキーは苦笑する。

「さっさと来い、一夏。」
「ちょっと待てよ。」
篠ノ之さんに連れられて教室を後にする一夏。
さながら荷馬車の子牛。

「いや若い事で。あの程度で取り乱すって、結構からかい甲斐があるな。」
「ガッキー。」
とりあえず釘を刺しておく。

こいつは状況を悪化させる要因だからな。
こっちに飛び火は非常に困る。

「自覚してるよ。ところで俊。」
「はい？」
「お前にも客。」

後ろを向くと確かに懐かしい顔が居た。
袖丈が異常に長い制服を着た癒されるような表情の女の子。
俺は眼鏡を外す。彼女の前では必要ないし。

「久しぶりだね～、としさん、が～ちゃん。」
「本音か。面と向かって話すのは確かに久しいな。」

布仏本音。更識の家に使える使用人で俺達の幼馴染。
そしてこいつや虚さん、それに更識姉妹と全員で昔は遊んでいた。
だが微妙に女子が騒ぎ出した。
何だ？

「そうだね～。普段はメールや電話で話してるけどね～。」

とりあえず周囲の騒音は無視して本音の話に集中する。

「そうだな。確か学園に入る前が最後だったな。」
「うん、そうだね～。」

ま、ある事が原因で彼女達とは疎遠だったが、一応こいつとは時々
連絡は取り合っていた。

「う～っす、本音。虚姉さんとか元気？」

「うん、元気だよ～。そっちは～？」
「中学生活は無遅刻無欠席の皆勤賞。」
「俺も皆勤賞だ。」

ガッキー。お前の場合は俺が無理やり連れて行ってたんだろ。
しかも朝が遅いお前を起こしてやったりして。
お陰で腐女子からは……いや、止めよう。
瘡蓋は剥がす物じゃないな。うん。

「おぉ～、流石だね～。」

本音もそこら辺を解っているのか俺の方を向いて褒めてくる。
微妙にこそばゆいな。

「あ、そ～言えば簪は何処のクラスだ？」

ガッキーが何気なく聞く風な感じで本音に尋ねる。
こいつ、分かってやってるな。

「四組だよ～。後で会いに行ったら～？」

俺は少し考える。
この後は部屋に届いた荷物を整理しなければならない。
そして一夏用のイベントがあるから、下手すれば居残り確定。
……。

「……いや、今日は止めておくよ。部屋の掃除もある筈だし、余裕が無いだろう。」

とりあえずそれらしいことを理由に挙げる。

「俺は会いに行くならこれと出会いに行くから。」
そう言って俺を指差すガッキー。
「そっか～。良かったら早めに会ってあげてよね～。」
「了解。」「分かったよ。」
すると2限目開始のチャイムが鳴り始める。
「本音、席に着かないと遅刻だぞ。」
「そうだね～。また後でね～。」
そう言うと自分の席に戻る本音。
そして眼鏡を付け直す。
面倒臭いですね。
～授業中～
チャイムが鳴って2限目が終了した。
ガッキー終了のお知らせ。
一夏終了のお知らせ。
「2人とも、大丈夫ですか？」
「「……。」」
『返事が無い。ただの屍のようだ。』
と、冗談は程々にしておいて、せめて一夏でも助けますか。

ガッキー？ほっとく。どうせ寿命以外じゃ死なんだろうし。

「一夏、何か言いたい事はあるか？」

とりあえず一夏に訊ねてみる。

返ってくる答えは１つでしょうが。

「全部分からん。」

やっぱり。

やはり期待することが間違えでしたか。

「なるほど。ガッキーは？」

「理解は出来るが死にそうだ。普通入学式の後って、オリエンテーションじゃないか？」

全く、それは一般高校での話だ。

ここはＩＳ学園。普通と一緒にするな。

「現実は無情だよ。」

しかし、それを差し引いても一夏の苦戦振りは予想以上ですね。

本当に彼は興味のある物以外には関心が無いんですね。

ある意味、私とガッキーと一夏は根底が似てますね。

「……一夏。もし良かったら少し教えようか？

次の時間の内容くらいなら、教えられるけど。」

「頼む。」

助け舟を出すと一夏がすがる様に頼み込む。

溺れる者は藁をも掴む。とは言ったものですね。

「了解。なら先程の時間のページを開いてくれ。」

私は教科書を開いて１つ１つ丁寧に教えていく。
一夏は食い入るようにそれを見て、必死に覚えようとする。
確かに彼に対して好感が持てますね。
真剣に覚えようとする姿は、人を引き付ける能力がありますね。
しかし、惜しむならばこれが女性限定と言う所でしょうか。

「ちょっとよろしくて。」

あ、そう言えばこのイベント忘れてましたね。
集中しすぎて足元を疎かにするとは、少し迂闊でしたね。

「「誰だ、あんた？」」

ガッキーと一夏が尋ねる。
と言うかガッキー、君知っててやってるね。

「あ、あなた方は！この私を誰だと思っているの！？」

一夏が反論しようとしてますが、今は困りますね。

「セシリア・オルコット。
イギリス代表候補生にして第３世代機『ブルーティアーズ』の操縦者。
なお、代表候補生とは国家代表ＩＳ操縦者の候補生の事で、山田先生も元ですが代表候補生です。
それと一夏。最低でもこれ位は覚えておく事。顔で『代表候補生っ

て何？』と語っていましたよ。」
「ま、マジで！？」
嘘です。原作通りだと思いカマをかけました。
けど、それを差し引いても表情に出ていましたよ、一夏。
やはりギャルゲーの主人公ってみんな表情に出やすいのだろうか？
興味深いと言えば興味深い事例ですね。

「本当だよ。そして一夏。ここの内容は……。」
「まだ話は終わっていませんわ。」
まだ用事があるのですか、彼女は。
こちらには無いと言うのに。

「あなた達がＩＳの事で解らない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。
何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

ノーと言える日本人になりたいですね、本当に。
しかしエリートですか。
私から言わせて貰えば君はまだまだ足りないんですよね。
私やガッキーは最強の背中を知っているから、君如きでは恐れも恐怖も抱かないんですよ。
それに、君以上の実力者なら数人は知っていますし。

「あれ？俺も倒したぞ。」
一夏が火にガソリンを注ぐ。
おや、よく燃えますね。

オルコットさんの顔が羞恥心からか赤く燃えていますよ。
「わ、私だけと聞きましたが？」
「それってさ、女子だけってオチだったり。」
ガッキーが更にガソリンを注ぐ。
一夏と違い、こいつはいい加減にしてほしい。
ここまで混沌としているのだ、これ以上何を望む。
「あなた方も教官を倒したって言うの！？」
「「一応。」」
二人でハモリながら答える。
するとさらに顔を赤く染めるオルコットさん。
「一応！一応とはどう言う意味かしら！？」
「ま～ま～。落ち着いてお茶でも飲みんさい。」
そう言ってガッキーは口を付けたお茶を出す。
「いりませんわ！！」
オルコットがそれを払うとお茶がガッキーに掛かる。
「だ、大丈夫か？」
「ふっ、水も滴る良い男の完成だ。」
とりあえずアッパーカット気味に殴る。
二度とこの世に帰って来ない様に本気で。

「チョバム！！」

すると、試合終了のチャイムが鳴る。

「ま、また後で来ますわ！！」

三流の捨て台詞を言って席に戻るオルコットさん。

「結局教えられなかったな。」

ガッキーがいつの間にか復活していた。

怪我も無く、残念だ。

「織斑、覚悟しておけよ。私は優しくないぞ。」

織斑先生からの死刑宣告が下される。

「ＡＭＥＮ。」

「南無阿弥陀仏。」

私とガッキーは一夏の為に祈りを捧げる。

捨てる神が居るのなら救う神も居る筈です。……多分。

「黒澤、板垣。今後はお前たちが面倒を見ろ。

もし、織斑の成績が悪かったら連帯責任を負わすから、覚えておけ。

」

閻魔大王様かの死刑宣告。

私たちに飛び火ですか？

「「一夏、後で責任取れ。」」
「何でだよ！？」

直後、出席簿が頭に落ちた。
……今週の日曜日、神社でお払いに行きましょう。そうしましょう。

第４話「オルコット、襲来」（後書き）

第３次スパロボＯＧ、碧の軌跡。
ＰＳ３が無いからＯＧは置いておくとして……。
早くしたいな～、碧の軌跡。

おまけ～もしお茶が熱かったら～

オルコットがそれを払うとお茶がガッキーに掛かる。

「熱湯パーティー！！」

床に転げ落ちるガッキー。
どうやらお茶がかなり熱かったらしい。
そしてのた打ち回る。

「うわ！？」
「きゃぁ！？」

一夏と周りの女子に被害が及ぶ。
そして床をまだ転がるガッキー。
すると動きが止まる。
熱くなくなったのか？

「黒か。」
「！？！？！？」

その刹那、全体重を踵にかけて全力で顔面を踏み潰す。
こいつのスケベ精神には恐れ入った。
まさかこの状況下でオルコットさんのスカートの中を見るとは。

「オルコットさん、大丈夫ですか？」

返事が無い。完全に固まっている。
可哀想に。本気で泣きそうな顔してますね。
とりあえず、これの顔でも踏み続けますか。

「あぁ、もっと……。」

戯言が聞こえたので再度本気で踏みつけ、止めを刺す。
もう2度とこちらの世界に帰ってこないように念入りに。

却下理由。
流石にやり過ぎた感が……。
相棒、お前はどう思う？
この展開は、御褒美か？
ではでは

第5話「決闘の始まりは……」（前書き）

今回のは少し短め。
視点は相方ＯＮＬＹ。

さて、クロニクル発売まで残り1週間。
ＦＥ午前免除試験まで残り9日。

リアルにやべぇ……

第5話「決闘の始まりは……」

ｓｉｄｅ・板垣

ほーんと、いい迷惑だよな。
一夏の失敗を俺達が尻拭いしないといけないなんて。
ま、言われた以上は素直に受けるしかないか。
少しは改善するように最善を尽くすだけだ。
とりあえず、今は千冬先生の授業を真面目に聞くことにするか。
あの凶器の出席簿制裁は受けたくないし。

「……そう言えば、再来週に行われるクラス対抗戦のクラス代表を決めないとな。」

あ、そう言えばこの後に一夏とオルコットのイベントが発生するんだっけ。
……不干渉を決め込むか。
放っといても話は勝手に進むだろうし、下手に手を加えれば飛び火する可能性も出てくるし、
ここは静観……。

「はーい、私は織斑君を推薦します。」
「私も織斑君を推薦します。」
「じゃあ私も織斑君を推薦しま～す。」
「私は黒澤君です。」
「あ、私も。」
「じゃあ私は板垣君で。」

出来そうにも無いな、これ。
けどなんだか俺、オマケ臭がする。
しかも推薦が１人って……悲しい。
でもこのままじゃマズイ気がする。主にイベント関係で。
俺は机を三回指で叩くと俊が気付いたらしく、挙手をする。

「何だ、黒澤。」
「先生、私と板垣君のＩＳは調整に最低でも１週間は掛かります。
ここは織斑君をクラス代表にしてみては？」

グッジョブ、俊。これで一夏を代表に出来る。
そしてオルコットとのイベント発生決定。

「それについては心配ない。２人のＩＳは既に修理、調整済みだそうだ。
張り切って修理した技術部の方々にお礼を言っておけ。」

ファッキンガム宮殿！
変態共め、余計なことするな！
貴様らはＫＹか！？ＫＹだな！！

「待ってください！納得がいきませんわ！」

ほら見ろ。余計な仕事が増えるし。
俊の方を見ると、眉間に皺が寄ってる。
ですよね～。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！」
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。」

「それを、物珍しいからという理由で極東の猿とこの人にされては困ります！」
「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、
私にとっては耐え難い苦痛で……。」

よく喋るね、この子。この手の誹謗中傷は基本的には無視だけど煩いね。
ま、反論したり関わればロクでも無い事に巻き込まれるのは必然。
ならここは我らが1級建築士がフラグを立てるまで待つか。

「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ。」

よし、よく立てた一夏。
これでハーレムフラグが1つ立ったぞ。おめでとう、ハーレム主人公w

「なっ……。」

オルコットの顔が赤くなっていく。
まるで茹蛸だな。
……今晩の夕飯は蛸料理だな。食べたくなってきた。

「あっ、あっ、あなたねぇ！私の祖国を侮辱しますの！」

いや、先にお前が言ってきただろ。
売り言葉に買い言葉とはこの事だな。

あ、俊が哀れみの目でオルコットを見てる。

「決闘ですわ！！」

よし、これで当面の問題は回避できた。
あとはどうやって一夏を代表にするかだが……。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい。」
「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ。」

奴隷か。そこにエロスを感じる俺に問題は無い筈だ。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

一夏君、そう言うなら先にルールを覚えようよ。
参考書を捨てたんだから、ルールなんて知らないでしょ。

「そう？何にせよ丁度良いですわ。
イギリス代表候補生のこの私、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

あくまで代表候補生なのに何言ってんだろ、この子。
代表候補生と代表じゃ月とすっぽんの差があるのに、痛い子。

「では織斑、黒澤、板垣の順にオルコットと戦ってもらう。」

……Ｗｈａｔ？
えーっと……つまり……。

「織斑先生、今、私と板垣君の名が出ました、聞き間違いでしょうか？」
「いや。お前の耳は正常だよ、黒澤。」
オワタ。
俺たちまでフラグが立つ可能性が出てきた！
どうにか阻止せねば。
「んじゃ、ハンデはどのくらい付けるか？」
あ、アホの一夏が話を進めてる。
ってか俺、絶対に出ないぞ～。
下手にフラグ立てたくないし～。
「あら、早速お願いかしら？」
「違う。俺達がどのくらいハンデをつければ良いのか、だ」
その直後、クラスからドッと爆笑が起こった。
ま、それが今時の女子の反応だな。ま、無知は罪とはよく言ったものだ。
「お、織斑、それ本気で言ってるの？」
「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」
「３人は確かにＩＳを使えるかも知れないけど、それは言いすぎだよ。」
女子がうるさく騒ぎ立て、一夏が縮こまる。
本当に、君たちの常識を俺達に押し付けないでくれ。
何気なく俊の方を見ると、あいつが眼鏡を外した。
あ、完璧に怒ってる。しかも本気で。

「黙れ。」

低く、殺意の篭った声が教室に響く。
その瞬間、教室の体感温度が数度下がった。
女子はその空気に怯えたり怖がったり、山田先生は泣きそうになってるし。
織斑先生は……効果なしか。流石だな。
と言うか俊、お前さん真っ向から敵作ってどうするの？
ま、それはそれで面白そうだけどさ。

「セシリア・オルコット。」
「な、なんですの？」

流石のオルコットも空気は読めるらしいな。

「ハンデは不許可だ。織斑もだ。ヤルなら徹底的にヤレ。」

おー怖い、怖い。
あのヤレは殺すほうの殺れだな。

「なら今回俺は待機するぞ。」
「良いぞ。あんな雑魚、俺1人で十分だ。」

あ、オルコットがまた赤くなってるけど、無視無視。
ま、コイツの沸点は低くないけど、キレると本気で怖いからな。
所謂、普段は大人しい子はキレると手がつけられないと言う奴だな。

「了解。ま、無理はするなよ。」
「話は済んだか。なら授業を再開するぞ。」

はぁ〜あ。しっかし、これからどうするんだよ。

第5話「決闘の始まりは……」（後書き）

ニコニコでたまに見る
「俺の従妹がこんなに凶暴でマジ困る＞＜」
とか
「ランディ兄は発売まで全裸待機ネ♪」
後ろでラニキが（，；ω；、）
共感してしまった。
俺のリアル妹も……

第6話「放課後」（前書き）

少し、調子が……
みなさんも体調には気をつけましょうね

第6話「放課後」

ｓｉｄｅ・板垣

放課後、とりあえず俺は一夏に勉強を教え、俊は一夏用の訓練メニューを書いている。
ま、当日までＩＳは動かせないだろうが、基礎体力やルールくらいなら教えられるだろう。
篠ノ之？そう言えば居ないな。どこ行ったんだろう。

「なぁ、鷹。」
「何だ、一夏？」

一夏が話しかけて来た。
質問かな？

「さっきの授業の時の俊の口調、変わってないか？普段の口調とぜんぜん違うんだけど。」

全く関係ないことだった。
少し凹みそうになる。

「あぁ、あれか。あれはスイッチの切り替えで変わるんだ。」

しかしそこは俺。スルーする事無く答えてあげた。優しいね～。
何か、俊の視線が否定しているような気が……。

「スイッチ？」

「そう。俊は自己暗示に眼鏡を付けるか付けないかを選択したんだ。だから眼鏡を付けると真面目になって、眼鏡を外すと好戦的になるんだよ。」

俺は米神を指で叩きながら説明する。
でも本当は別の理由があるんだけど、今の一夏には喋れないんでね。御免ね、一夏君。
男には秘密の１つや２つあった方がカッコいいんだよ。

「へぇ。あれって誰でも出来るのか？」
「出来るよ。普通の人なら１０年２０年位掛かるけど。」
「げ。」

何だよ一夏、人を化け物か何かの様に見る目は？
そりゃ俺らは5年で習得したけどさ。

「俺も俊も訓練したからあれが出来るのであって、一朝一夕で出来るかよ。」
「そうだよな。」
「さて、一夏。」
「ん、何だ？」
「明日からはお前さんの部屋で勉強する。そんで、これを1週間で覚えて貰うから、４６４９。」

とりあえず俊の参考書を渡す。
重要な所はマーカーを引いてあるから、解り易い筈だろう。
あとはこいつの努力次第だな。

「要するに、マンツーマン学習だ。居残りしとけよ。」
「なお、明日から基礎体力作りもして貰うから、そのつもりで。」

「えっ？」

俊から唐突に一夏へ死刑宣告が言い渡された。

「ＡＭＥＮ。」

「いやいや、助けてくれよ！！」

俺は哀れな子羊に祈りを捧げる。

「神は平等だ。皆に平等に幸福と不幸を与える。」

「あんまりだ！！」

一夏と馬鹿なことを言いあってるとドアが開く。

そこには山田先生と暗黒卿が居た。

「あ、山田先生。」

「あ、先生たち。どうかしたんですか？」

「部屋の鍵を渡しに来たんですよ。」

すると鍵を渡される。

一夏は渡されなかった。

「黒澤君は元宿直室を。板垣君は１１２０を。織斑君は１１２５です。」

一夏はともかく、俊が一緒じゃないのは寂しいな。

ま、上の思惑なんぞクソッタレだが、ここは大人しく従うか。

しかし、どうもこの部屋割り、後ろでウサギが踊ってる様な……。

よし、気のせいにしよう。

考えても答えは出ないんだし。

「それと、大浴場はまだ使えませんので……。」
「ｏｈ，ｓｉｔ．」
正直、大きなお風呂に入りたいです。
すると一夏が不思議そうに首を傾げる。
「え、どうしてですか？」
「お前さん、女子と一緒にお風呂に入るのか？」
「あっ。」
一夏～。お前って本当に主人公だな。
俺は呆れて物も言えんぞ。
「そ、それはいけませんよ、あでもでも……。」
あ、山田先生が向こうの世界に旅立った。
これは当分戻ってこないな。
「一夏、言っておくぞ。」
「ん？」
いつの間にか眼鏡を外してる俊。
本当にいつの間に外したんだ？
「自分の常識を全てとするな。世の中には貴様の常識が通用しないこともある。
それが当たり前だ。」
「うっ。」

手厳しいね、俊は。

「それと山田先生、そろそろこっちの世界に戻って来ないと困るんですけど。」

「はっ、私ったら。」

しかし妄想癖があるね、山田先生。

ま、それはそれでいいけどさ。

「じゃ、部屋行くか。」

「そうだな。俊は？」

「野暮用を済ませてからだ。」

そう言うと俊は鞄を持って先に教室を出て行く。

野暮用って、何だろ？

「さて、行きますか。」

「おう。」

さて、お楽しみの時間だよ、一夏君。

この後、一夏を使って部屋を片付けたのは言うまでもない。

利用できるものは利用しようねｗ

ｓｉｄｅ・？？？？

ある部屋で私は画面に向かって会話をしている。

「……で、私にどうしろと？」

『……。』

画面の向こうの人は忌々しそうにこちらを見る。
しかし、答えは1つ。
「無理に決まっています。詳細は報告書通りです。」
『……。』
すると正論を持ち出される。
「それは重々承知しています。ですが、これ以上は限界です。」
マスコミの対応には処理限界寸前まで膨れ上がっている。
最近では広報課から苦情が相次いでいる。
『……。』
向こうも承知はしているのか納得はしている。
だが、これとそれとは別らしい。
「えぇ、それはしています。最悪の事態も想定して動けるようにはしています。」
『……。』
安心したらしく、吐く息が聞こえる。
ふと、疑問が浮かぶ。
「『椅子を尻で磨く奴ら』や『あの企業』は如何致しますか。特に『企業』は動きが読みにくいですが？」
『……。』
すると意味深な言葉が聞こえる。

「鈴、ですか。了解。ではこの件はそちらは任せました。」
『……。』
それと、もう1つ有ったんだよな、悪い知らせが。
「しかし、せめて御覚悟を。伸ばせて1ヶ月から2ヶ月が限界です。」
流石に情報規制も限度がある。
多分、これが限界時間だろう。
『……。』
だが、どこか納得した顔をする。
薄々は感じてたと言うことか。
「お任せ下さい、翁。
彼らは全力で守ります。我が誇りに賭けて。」
『……。』
すると翁は穏やかな顔をする。
「では失礼します。」
画面を落とす。
ｓｉｄｅ・黒澤

夜遅く、一夏が篠ノ之とイベントを発生させている最中、俺はのんびりと帰室していた。
しかし騒々しいな。廊下まで痴話喧嘩の声が聞こえるぞ。

「全く。」

他人の事だからどうでも良いが、煩いのは止めて欲しい。
俺は兎も角、他の女子に迷惑をかけるだろうに。

「ここか。」

部屋の前に着いた。
渡された鍵を使って扉を開ける。

「さて、片付けるか。」

今日から住む事になる部屋の扉を開ける。

「お帰りなさい。私にする？わたしにする？それともワ・タ・シ♪」
「……。」

無言で扉を閉める。
疲れているのか？
そうだ、疲れてるんだ。
玄関に裸エプロンの女子が居る訳が無い。
間違ってもそれが元幼馴染な訳が無い。

「ふぅ。」

疲れて幻覚と幻聴を聞いただけだ。

そうだ、そうに違いない。
今日は早めに寝よう。片付けは明日だ。

「よし。」

俺は決意を新たに再び扉を開ける。

「お帰りなさい。私にする？わたしにする？それともワ・タ・シ♪」

現実は非情だ。
玄関には我が校の生徒会長、更識楯無が正座で出迎えてくれた。
だが、俺には地獄の使者にしか思えない。

「……片付け、手伝ってくれ。」

搾り出した言葉が哀愁が漂っていた。
あぁ、本当にガッキーが居なくて良かった。
居たら居たで少し別の世界に旅立ってもらったが。

結局、何だかんだで二人でそこそこ広い部屋をせっせと片付ける。
どうやら元々は宿直室だったのかガス線やシンクが備え付けられている。

楯無が「何で襲わないんだか。」とか「本当に裸エプロンの方が良いのかな？」とか言ってるが無視無視。
一々相手にしてたら精神的に持たない。
欲情？してたるか！

「この本はどうするの？」
「そこの学校用の本棚に置いてくれ。」
「了解。」

テキパキと本を置いていく楯無。
俺は自分のベットにシーツや布団を敷いていく。
よし、寝床は確保したな。

「この置物は？」

新聞紙から埴輪が出てくる。
懐かしいな。昔、骨董市で買った埴輪。
少ないお小遣いで値切ったっけ。
今じゃいい思い出だな。

「机の上。」
「ほいほい。」

机の上の埴輪。
えらいシュールだな。
次に室内用の物干しを組み立てていく。
部屋が少し広いのは便利だな。

「食器類は？」
「とりあえず流しに置いてくれ。後で全部洗う。」

今度はガスコンロを設置する。
この部屋の良い所は、ガス線と水道が引いてある事だろう。
おかげで洗い物が出来たりお湯が沸かせる。

「うん。」

シンクに水を張る。
そこに食器が浸かってく。

「服は？」
「下着は俺がやろう。他のシャツやジャケット、それにズボンはハンガーに掛けて干してくれ。」

ハンガーは、出てるな。

「ちょっと手間だね。」
「手伝おう。」

楯無はハンガーを使ってズボンや春物ジャケットなどを干していく。
俺は自分の下着を片付けていく。

「これで全部？」
「あぁ。コーヒー飲むか？」
「ミルクと砂糖入りでね。」
「了解。」

コップを探すが、湯飲みしかない。
風情は無いが無い物強請りか。

「ほれ。」

マグカップくらいの大きさの湯飲みを楯無に出す。

「湯飲み……。」

楯無、言いたい事は解るが、その哀れみの視線は止めてくれ。
「風情が無いのは解るが、我慢しろ。」
俺だってマグカップで飲みたかったよ。
「今度は私専用のカップを置いといてね。」
「了解、了解。」
今度の休みにでもコップでも買いに行くか。
とりあえず一口。
……うん。
「インスタントだが美味しいな。」
「そうだね～。」
インスタントでも美味しいが、挽きたて淹れたてが一番だな。
そしてそれをサイフォン式で入れる。
そしてお菓子をお供に一服。
……パーフェクトだな。
「で、そのままで良いのか？」
「あれ、欲情しちゃう？それとも欲情しちゃった？」
こいつは、人が心配しているのに。
全く。
「寒くないかと言ってるんだ。」
「大丈夫だよ♪」

「そうか。」

なら問題ないな。
そのままコーヒーを味わう。
すると楯無がジト目でこちらを見てくる。今度は何だ？

「……そこは俺の服を貸すって言うのが王道じゃない？」
「なら今度から服は着て来い。」

俺は上下ジャージを楯無に渡す。
楯無はいそいそと着込む。
やっぱり寒かったのか。

「少しぶかぶかだね～。」

楯無が本音みたいに袖をブラブラする。
……似合うな。口には出さないが。

「それと、合鍵だ。」

2つある鍵の1つを外し、投げて渡す。

「良いの？」
「ただし、部屋は荒らすな。俺の私生活は荒らすなよ。」
「うん。」

嬉しそうに頷く楯無。
そこまで嬉しいのか？
ま、どうでもいいや。

「ま、とりあえずコーヒー飲んだら今日は寝ろ。夜更かしは女性の肌には大敵だぞ。」
「肝に銘じておくね。」

少しして、空になった湯飲みが置かれる。

「ごちそうさま。じゃ、お休み。」
「あぁ、お休み。」

扉から楯無を見送る。
本当に幼馴染は大切だな。何だかんだで手伝ってくれるし。

ふと、時間が１２時前になっていた。
……寝るか。

第6話「放課後」（後書き）

おまけ
主人公補正のレベルは
一夏＞俊＞鷹
となっています。
なのでどうしてもハプニングは一夏が多いです。
ま、本当にどうでもいいことですけどねw

第7話「準備期間」（前書き）

テスト寸前の更新。
死ぬ気で逝こうｗ

第7話「準備期間」

ｓｉｄｅ・黒澤

早朝、私は篠ノ之さんを呼び止め、大筋の話をする。
朝食前なので、出来る限り話は端折りましたがね。

「……と、言う事で篠ノ之さん。織斑君に剣道を教えてもらえますか。」
「それは良いが、どうして一夏が来ないんだ？」

なるほど。彼女からしてみれば一夏が頼んでくれる事を望んでいたのですね。
しかし申し訳ありませんが私で我慢して下さい。

「無論、彼に来させたかったのは山々ですが、残念ながら時間がありません。
彼には体力、気力、精神力、知識と必要な４つが欠落しています。」

付け焼刃ではあるが、知識は教えても無駄にはならない。
本人は頭から煙を出して唸っているでしょうが、仕方がありません。
自業自得です。

「……。」
「正直な所、今のままでは勝てる筈がありません。
相手は性格が最悪でも代表候補生。ＩＳの搭乗時間は彼女の方が遥かに上です。
それに、嘆いていても結果は変わりません。

ならば、例え短い時間でも最善を尽くす。それが私の考え方です。」
「……。」

しかし、彼女も表情で損をするタイプですね。
今の彼女の表情はまるで睨んでいる様に見えますし。
実際に睨んでいるかどうかは別ですけど。

「それに、上手く行けば一夏君と二人っきりの時間ができますよ。」
「！？」

流石に動揺してますね。
他人の恋心を利用するのは人として最低以外の何物でもないのですが緊急時ですし、
「大丈夫だ、問題ない。」
と三木さんボイスで自分に言い聞かせますか。

「わ、分かった。他でもない一夏の為だ。協力する。」
「感謝を申し上げます。」

最低だな、俺と言う奴は。

「それと私は箒と呼んでくれ。その……篠ノ之さんと呼ばれるのは……。」

確かに彼女の場合、苗字で呼ばれるのは抵抗ありますね。
けど、そこが面白いんですけどね、あなたは。

「分かりました。では自分も俊で構いません。」
「分かった、俊。」

さて、時間は限られていますし、早急に動きますか。
しかし、彼女を見ていると面白いですね。
情緒不安定や武士娘。
ガンパレの壬生屋を見ている様で本当に面白いです。
おっと、時間も無いようですし、急ぎますか。

ｓｉｄｅ・板垣

朝食の時にあのイベントが起きたけど、やっぱり好きになれんわ、箒。
自称でも姉嫌いを公言しているのに「あの篠ノ之の妹ですから。」と言って上級生を追い返す。
何だかな〜。君、言ってる事としてる事が支離滅裂だよ。
で、最後には姉に泣きついてＩＳを貰うか。
いいご身分だこって。
本当に好きになれないわ。
俊は俊で『情緒不安定で見ていて飽きない。』とえげつない事を言うし。

……そう言えば、俊が裏で暗躍してるな。
特に一夏と箒のイベントとかとか。
どうする気だろう、あいつ。

そして放課後、一夏に勉強を教え終わった後、屋上で俊と缶コーヒー飲みながら弛んでだ。
タバコ？吸わないよ。吸って退学なんて笑い話だし。百害あって一利なし。
昼のイベント？無視無視。俺達は傍観。

一夏？今頃、剣道場で幼馴染と汗と血を流してるだろう。青春してるね～。

「で、どうなんだよ、俊。」

「何がだ？」

眼鏡を外した状態だから、かなり口が悪い。

何時もの事だけど。

「箒と一夏のイベント。」

「成功した。」

「あっそ。」

ま、成功してなきゃ箒と剣道場には居ないか。

そして一夏の死亡フラグも立たないか。

「どうした？」

「いや。やっぱり俺、箒好きじゃないわ。」

特に朝の1件は正直萎えた。

「その心は？」

「姉の所為で不幸になったって言ってるけど、どこが不幸なんだ？」

最近は特に思う。

原作じゃ監視が就いたとか転校してたとか言ってたけど、だからどうした？

両親も死んでないし自分の体が欠落してない。

それのどこが不満なんだ？

もし良かったら教えてくれ、箒。

「知らん。他人の不幸の価値観なんぞ知ったことか。
箒にとっては不幸だったんじゃないか。
俺はどうでもいいがな。」

俊は俊でザックリ切り捨てる。
容赦無いな、お前さん。

「……案外、不幸って言葉を口にしてる時点で不幸じゃないだろ、あいつ。」
「その心は？」
「だってあれで不幸なら、一夏やフランス、イギリス、ドイツの方がもっと不幸だと俺は思うぞ。」

一夏は両親に捨てられた。フランスは父親に道具扱い。
イギリスは両親がそろって事故死。ドイツは兵器として人工的に生み出された。
どれも箒より重い気がする。
俺の主観だがな。

「中国は？」
「まだ不幸とは言えないな。」

両親が離婚しただけじゃ少しインパクトが足りないな。
せめて暗殺されたなら話は違うが。

「ま、本当に不幸な奴は口じゃ言わないしな。」
「そうだな。」

ま、これは経験談。

「で、どうするんだ？」
「とりあえず、１週間は鍛える。」
「了解。」
さて、仕上げは当分掛かるかな？
ｓｉｄｅ・黒澤
夜、本来は外出禁止なのだが、俺はある一角で刀を振るっていた。
斬る。突く。払う。
８年使い続けている刃を潰した模擬刀を一心に振るう。
昔はこの重さに泣いていたが、今は重さも感じない。
しかし、まだ『速さ』が足りない。
せめて千冬さんレベルじゃないが、そこまで昇華させたい。
「っ。」
限界は自分の線引き。なら、それを上回って見せる。
斬る。突く。払う。
だが、まだ遅い。
あの光景の太刀筋は、もっと鋭かった。
「くっそ。」

原因は分かっている。
何処まで頑張っても自分の限界は見え始める。
それが今なのかは分からない。
だが、先の見えない闇は恐怖しかない。

「やれんな。」
「そうだね。」

後ろから声がする。
慣れた事とは言え、心臓に悪いな。
動揺はしないがな。

「楯無か、どうした？」

構えを解かずに尋ねてみる。

「いや、部屋で待ってたんだけど来ないからさ。」
「少し思う所があって模擬刀を振るってた。」

とりあえず部屋で待っていたの部分は無視する。
再び集中し、力を軽く抜く。
もう少し早く振るイメージで。

斬る。突く。払う。

「速いね。」

楯無が言っている事は本当だろう。
多分、俺も確実に速いと言える一撃だったろう。
だが。

「まだ遅い。これじゃ千冬さんに通用しない。」
ノイズは掛かるがあの光景は思い出せる。
最強の白と黒の終わる事無き輪舞曲。
終わる事無き円舞曲。
あの高みを目指して、ひたすら振るい続ける。
「それは贅沢だよ。
あれだけの光景はもう二度と起きないよ。」
「分かっている。
望んでも二度と手の届かない、残光なのは。」
そう、楯無の言っている事も分かっている。
だが、あの記憶が俺を突き動かす。
だから俺は肯定し。
「だが、俺はそれを望んだ。だから突き進むのみだ。」
否定する。
「ま、今の目標は千冬さんだ。
そして最終的には『最強』の名を得る。」
刀を振るい、決意を新たに構え直す。
「フリュンデル？行けるのかな～？」
「ま、お前が卒業する前に『生徒会長』を得ても良いかも知れんな。
」

おどけた口調の楯無に、とりあえず軽くジャブを入れる。

「私、強いよ。」

「奇跡は待つものじゃない。自分自身の手で起こすものだ。」

元の世界の記憶がまだある中、未だに鮮明に覚えている台詞。

青臭いかもしれないが、これが俺の信念だ。

「変わらないね。」

「さあな。」

ま、根底が変わらないのは否定しないがね。

「さて、戻るか。」

流石に時間帯が遅いので、切り上げることにした。

「そうだね。」

俺の後を着いて来る楯無。

コイツは……。

「お前はあっち。」

「えぇ〜。」

お前な。

「えぇ〜、じゃない。」

「はいはい。じゃ、おやすみ。」

「あぁ。良い夜を。」

そうして俺は楯無と分かれた。

第7話「準備期間」（後書き）

しかし、比べる癖が悪いのだが、少ないよな～。
ま、他と比べる時点で駄目なんだけどさ、ね。
やっぱり、多くの人に見てもらいたいという部分が、ね。
……寝よ。
明日は学校だし。

第8話「白対蒼」（前書き）

夏バテと専門学校の夏休みの短さでテンション駄々墜ち。
くだくだです。

第8話「白対蒼」

ｓｉｄｅ・板垣

そんなこんなで、期間の1週間を勉強と篠ノ之先生の剣道教室と俊の体力づくりで全てを費やした。
まぁ、一夏は若いから気合も気力も体力もあるし、何とかなるだろう。
毎日の食事に『ハイポーション』を混ぜたから、疲れは残ってない、筈だ。……多分。
まあ、最終日だから贅沢に飲ませて寝かせたのは一夏には良いトラウマになるだろう。

そして試合当日、早めに搬入された白式を一夏用に調整していた。
具体的には俺はＩＳの方を、俊はＯＳの方を。
しかし、俊のタッチタイピングが異常に早い。何かあったのか？

「白式、か。」
「知っているのか、雷電！？」

すると俊が微妙な表情になる。
あれ、外したかな？
このネタ知ってるはずなのに。

「お前、これが終わったら寝ろ。昨日、徹夜だったろ。」
「そう言うお前こそ2日くらい徹夜してないか？」

そう言えば、こいつはこいつで忙しそうに動き回っていたが、大丈夫なのか？
再びキーボードが壊れそうな勢いで打ち込んでるし。
つーか、キーボードが本気で壊れそう。

「大丈夫だ。今朝もハイポーションをコップ3杯も飲めた。タッチタイピングも絶好調だ。」
「うわぁ。」

乾いた笑顔が怖いよ、俊くん。
と言うかこいつ、微妙に病んでるぞ。
ヤンデレバットエンドとか某学校日の主人公だけで十分だからね。
しかも、それが男とか親が（色々な意味で）泣く。

「俺が言うのもなんだが、お前少し寝ろ。」
「大丈夫だ。この1週間で6時間も寝たんだ、十分だろ。」
「嘘付け。」
「嘘は言っていない。寝たのは最初の3日間で2時間ずつ。計6時間。
どうだ、計算間違いはないぞ。」

とりあえず、この後の為にもこいつを寝かせるか。

「俊、この後に試合を控えているんだ。寝とけ。」
「了解。時間になったら起こしてくれ。」

そう言うとロッカールームに引っ込む。
ま、試合まで寝れれば十分だろう。
そして手早く作業を続ける。

……あれ？アイツ、あの短時間でプログラム入力したのか、コイツ？
……すげーな、おい。

少しして、一夏のみ到着。
あれ、原作じゃ他の人たち居た筈なのに？

「一夏、先生達は？」
「先に管制室に向かった。」

ふむ、バタフライ効果か。少し予定変更しないとな。
ふと、一夏がきょろきょろしている。
何だ？

「どした、一夏？」
「俊は？」
「寝かせた。お前の手伝いでギリギリまで起きてたからな。」

すると一夏が申し訳なさそうな顔をする。

「ごめん。」
「謝るな。これが仕事だ。」

最後に外付けにショットガンをセットする。
拡張領域は皆無だが、別の領域を使って仕舞っている。
ま、これ以外にセットできないけどね。

「最適化が済んでないから多少不便はあるだろうが、そこは俊が既に動き易い様にＯＳを調整している。」

一夏がＩＳを装着する。
「既に初期化が済んでいるから、最適化の時間ロスしかない。」
「あぁ。」
俊が終えているから俺が確認するだけで済むのはありがたい。
一夏も手足を動かし感覚に馴染もうとしている。
「射撃武器のコントロールは大丈夫だろうな？
こいつにはＦＣＳなんて物は無いだろうし、正直、マニュアルの方が当てやすいし。」
「多分。使う分には問題ないかな。俊にも教わったし。」
あ～、そういえばそうですね。
１日に何発撃ったのやら。
弾薬代は何処から捻出したのやら。
「一応、対抗策のショットガンを載せたから、後は自由にしろ。」
「おう。」
するとハッチが開く。
「それと一夏。」
「何だ？」
「勝て。それだけだ。それが俺達の喜びだ。」
俺の意図が分かったのか、一夏が親指を立てて笑う。
「まかせろ。」

ハッチが開放し、一夏が出撃する。
やれやれ。
「これでやっと徹夜から開放されるね。」
肩を回しながら我らが女王陛下の所へ向かう。

ｓｉｄｅ・一夏

体が軽く感じる。
まるでオーダーメイドスーツを着ているような感覚だな。
会場は既にクラスのみんながいた。
そして目の前には蒼いＩＳが浮いていた。

「あら、逃げ出さなかったのですね。」
「当然だろ。」

開始早々、嫌味を言われる。
だが我慢我慢。
ガッキー曰く、「三下の台詞」だし。

「さっそくですが、最後のチャンスをあげますわ。」
「は？」

何が言いたいんだ、こいつ。

「えぇ、このままでは私が一方的に勝利を得るのは自明の理。
ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝りなさい。

そうすれば、許して差し上げますわ。」
もう、我慢しなくても良いよな。
「あぁ、確かにお前の言う様に俺は弱い。」
「そうでしょう……。」
けど、俺は負けれない理由が、引き下がれない理由がある。
「だがな！！」
「っ！？」
俺は刀を展開し。
「俺の為に時間を削ってくれた俊、ガッキー、そして箒。」
構える。
「３人の期待を裏切る訳には行かないんだよ！」
「では墜ちなさい。」
俺は初撃のレーザーライフルを避ける。
「最初から行きますわ、ブルーティアーズ。」
前面からの４基一斉砲火を避ける。
単純な射撃じゃないけど、俊の訓練に比べたらどうって事はない。
「あら、やりますわね。ですが、射撃武器の無いあなたに……。」
「甘いぜ。」

刀を収納し、ウェポンセレクトでＭ－１３ショットガンを展開する。
そして１基のブルーティアーズを狙い撃つ。
見事命中し、破壊する。

「ショットガン！？」
「これなら拡散が大きくて当たるぞ。」

これを事前に渡してくれたガッキーにはお礼を言わないとな。

「くっ。」
「ビットは耐久力が高くないから。」

ポンプアクションで次弾を装填し、機動予測をして撃つ。
続けて２基目を破壊する。

「墜ちやすい。」

しかもショットガンの拡散率が適度に広がり、命中率も高い。
本当に感謝するぜ、ガッキー。

「ですが、まだブルーティアーズも私も健在ですわ。」

ビットの一斉砲火を避けるが、セシリアのレーザーライフルが命中し、肩の装甲が削られる。

「マズッ。」

流石に全部は避けきれなかった。
だが、絶対防御を発動させなかっただけ儲け物か。

「あら、もうギブアップかしら？」
「まさか。まだまだ。」
だが現実はビットの数が少なくなったからか、セシリアの隙が少なくなった。
複数の方向からの攻撃を何とか回避していく。
「だけど、負けれないんだ！！」
無理やり方向転換をしてトリガーを引く。
すると運よく命中し、ビットを破壊する。
「ラスト1。」
ポンプアクションで装填し、続けてトリガーを引く。
だが、流石に簡単には命中しない。
「最後の1つなのに。」
「これ以上はやらせませんわ！！」
セシリアが猛攻を仕掛けてくる。
レーザーライフルと最後のビットによる集中砲火。
流石に今は回避に専念することにした。
「あら、先ほどの勢いは何処へ行ったのかしら。」
「くっそ。」
さっきに比べれば攻撃数は少ないが、射撃武器がこれだけの俺には正直キツイ。

しかもそのショットガンの残弾も1発のみ。
どうにかして当てないと。

「なら博打だ！」

俺は振り向きざまに撃つ。
だが掠ったものの破壊できなかった。

「あら、これまでですわね。射撃無事の残弾がなくなっては手も足も出ないでしょう。
所詮は男。この程度ですわね。」

正直、カチンときた。
1発外したくらいで威張るなよ。
とりあえず。

「必殺、投擲！！」

弾切れになったショットガンをセシリア目掛けて投げつける。
俊曰く、「予想外の行動は奇襲の基本」だ。

「なっ！？」

咄嗟なのか、レーザーライフルで防御される。
と言うか当たったよ。やっぱりやってみるもんだな。

「ふん、悪あがきですわね。これで武器はありませんわね。」
「まだ、あるぞ。」

俺は刀を展開する。

正直、間合いが足りなさ過ぎる。

「あら、往生際が悪いですわね。」

「当然だろ。負ける気は無いんだ！」

せめて、肉を切らせて骨を絶つ。

銃口を見て、トリガーを見て、避ける！

それ以上は、必要ない。

「では、フィナーレと参りましょうか。」

レーザーライフルから光が走り。

「っ。」

動かない俺の横を通り過ぎていく。

「・・・・・・あれ？」

命中しなかった。何で？

「ど、どうしてですの！？」

当のセシリアも困惑している。

けど、何だか分からないけど、今の内に。

「貰ったー！！」

一気に加速して間合いを詰める。

「くっ、ブルーティアーズ。」
最後のビットがセシリアの前に立ち、俺をロックオンするが、知ったことか。
「男は度胸！！」
ビットの攻撃が顔を掠める。
だが俺は止まらずに深く踏み込んで、最後のビットを一刀両断にする。
「これで、最後だ！！」
返し刀で踏み込み。
「では、プレゼントですわ。」
脚部からミサイルが接近する。
爆炎が俺を包む。
「残念ですわね。ブルーティアーズは６基ありましてよ。」
セシリアの馬鹿笑いが聞こえる。
「あら、存外しぶといのですね。」
「ま、それだけ鍛え上げられたからね。」
「ですが、かなり装甲が欠落しておりますわね。」
言われても反論できない。
事実、白式は見るも無残な状態になっている。

けど、問題ない。

「残念だな、切り札はギリギリまで取っておくものだぜ。」

「えっ？」

白式の最適化を許可する。

全身の装甲が修復し、最適化されていく。

そして、俺だけの白式になる。

「な、あなた、まさか初期設定で！？」

「あぁ。今まで戦ってた。」

これは俊のおかげだ。

本当にあの二人には大きな貸し作ったな。

武装を無意識に取り出す。千冬姉が世界を取った唯一振りの太刀。

雪片、いや、雪片弐型。

「とりあえず、千冬姉の名と俊たちの努力の為に、勝つ。」

俺は雪片弐方を構え、剣先をセシリアに向ける。

「くっ。」

セシリアがレーザーライフルを構えるが、今なら自信を持って言える。

「それは怖くないぜ！！」

矢張りさっきの投擲が原因だろう、また外れる。

「い、インターセプト！」
セシリアも諦めたのか近接戦闘用の武器を展開する。
けど、今の俺は負ける気はしない。
「甘い！」
「はぁああ！！」
鍔迫り合いの後、セシリアのインターセプトを弾き飛ばす。
セシリアのブルーティアーズを断つ。
『勝者、織斑一夏。』
ふ～、ＥＮが１割か。
本当にギリギリだったな。
「次は俊と、か。」
ｓｉｄｅ・黒澤
これを着るのも２度目だな、と、心の中で呟く。
正直、システムを起動させる為に寝る間も惜しんだのは否定できない。
しかし、これで一夏に見せられる。
最強の動きを。
「生命維持限界値を７に設定。次は、非常時にはデータをバックアップへ転送後、自壊する様に設定。
後は、通常時には非公開ファイルとして設定。

……これくらいか。」

とりあえず、このシステム、あの人たちには見せられないからね。

「さて、出撃するか。」

俺はロッカーを一瞥する。

「行ってくるよ。」

第8話「白対蒼」（後書き）

ハイポーションは参考的にはニコ動のアレをイメージして下さい。

あと、少し学業の都合上、更新がドンガメ並みになりますが、更新はします。

さて、一夏、義理の弟フラグでも立たないかな？

そうすれば面白いのにw

ではでは

番外編「聖なる夜は」（前書き）

はい、久々の更新ですが、番外編です
本編はもう少しであげます

番外編「聖なる夜は」

「よし、サンタ狩りに行くぞ。」
それは阿呆の唐突な一言から始まった。

12月25日は聖夜……だが、関係の無い俺やガッキーは楯無や簪、
それにラウラを
呼んで鍋パーティーをすることにした。
一夏？ハーレム中だろ。呼ぶ気はない。

「ラウラ、野菜入れてくれ。白菜は芯を先に入れろよ。」
「分かった。」
「簪、肉取ってくれ。」
「あ、うん。」
「俊～、お玉。」
「ほらよ、楯無。」
「白菜、白菜。」
「もやしもあるぞ。」
「個人的には大根食べたいなぁ。」
「豆腐、ある？」
「しかし、ドイツではこんな風には食べなかったな。」
「鍋は良いぞ、ラウラ。こんな風に和気藹々と食べれるんだからな。
」

「しかも太らないし健康的だ。」

そして、〆の雑炊に取り掛かっているときだった。

「よし、サンタ狩りに行くぞ。」

「何言ってるんだ？」

俺は当たり前のように聞き返す。

「子供達の夢を奪うんだよ！！」

「今更だけど最低だな、お前。」

呆れ果てた声で言う。

「で、サンタ狩りとは何だ？」

ラウラが首を傾げる。

しかも純粋になんだと言う目で見ている。

心が汚いガッキーは悶絶している。

しかしそれも数分で元に戻った。

「夜空を駆け回るサンタを襲ってプレゼントを強奪するんだよ。」

決めポーズと共にドヤ顔をする阿呆。

人として終わってるな、コイツ。

「サンタって居ないよ～。」

楯無が何かを言うが、トリップしているガッキーには通用しない。

「よし、逝くぞ！！」
何故か俺の首根っこを掴むガッキー。
もしかして俺も一緒なのか？
「朝までには帰る。」
暖かい部屋を後に、俺はガッキーと共に雪が降る夜空を駆ける。

町ではカップルが熱い一夜を過ごし、
俺は暖かい部屋で雑炊を食べている筈だったんだが。
「何処に居るんだ、サンタクロース！！」
血走った目で周囲を見回すガッキーを背に、俺は寮の方向を眺める。
「キムチ鍋、雑炊まで食いたかったな。」
あの後は少し凝った雑炊を作る筈だったのに。
この戯けが。
「しかもサンタはお父さん達であって、本当に居る訳無いだろう。」
「いや、居る！！毎年ここでそりに乗ったおっさんが多数目撃されている。」
「何処の情報だ、それは？」
「３ｃｈ。」

もう呆れて何も言いたくない。

シャンシャンシャン　シャンシャンシャン　シャンシャンシャン

すると、どこからか音が聞こえる。

「ん？」

そこに居たのは、自分の常識を打ち破られる光景だった。
そりに乗った中年太りのおっさんとそりを引く赤い鼻のトナカイ。

「……。」

正直、開いた口が塞がらない。
本当に居たんだ、サンタクロース。

「エンゲージオフェンシブ！！戦闘開始！！」

何か突貫していくのを呆然と見送る。

「って硬い！！」

ガッキーはＭ９５０マシンガンを掃射しているが、
命中しているのに傷１つ着かないそり。
するとそりがガッキー目掛けて突撃してくる。
しかも、速い！！

「え？」

そしてそりに轢かれて海に墜ちていくガッキー。
そして。

ドボーン

「あ、墜ちた。」

後で回収しておくか。
さて。

「済みませんでした、あの馬鹿が邪魔をして。
どうかこのまま子供達に夢を配ってあげて下さい。」

一応、謝っておく。あんなのに勝てる訳が無い。
するとサンタさんが俺の下まで来ると袋から小包を取り出し。
そしてそれを俺に渡してくる。

「俺にですか？」

無言で頷くサンタ。

「ありがとうございます。」

礼をすると満足したのかサンタが去っていく。

「さて、とりあえず回収するか。」

阿呆で戯けだが腐っても俺の親友を海から釣り上げる。

とりあえず阿呆を部屋に置いて、自室に戻る。

「で、それがプレゼント？」

楯無が興味半分で見ている。

「開けて見ようよ。」

簪も興味があるらしい。

「了解。」

包装用紙を丁寧に取ると箱が見えた。

「開けるぞ。」

箱を開けるとその中には包装されたおもちゃが入っていた。

「え。」

「何これ？」

「鉄甲機ガフィール？」

そう、俺の子供の時に流行った近未来型ロボットアニメの主人公機。

けど、問題はそこじゃない。

「これ、俺のシュナイダーだ。」

角の欠けた主人公機。
これが本当に欲しくて親父に我侭を言ったんだっけ。
それで遊んでたら間違って角が片一方折れたっけ。
そして何故か悲しくなって大泣きしたっけな。
結局、これが親父達との最後の思い出だったんだよな。

「本当に、ありがとうございますだな。」

メリークリスマス。良い夜を

番外編「聖なる夜は」（後書き）

なお、一夏はハーレムですので書く気はありません。
あしからず

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6689t/

インフィニット・ストラトス～アナザーエピソード～

2011年12月26日01時45分発行